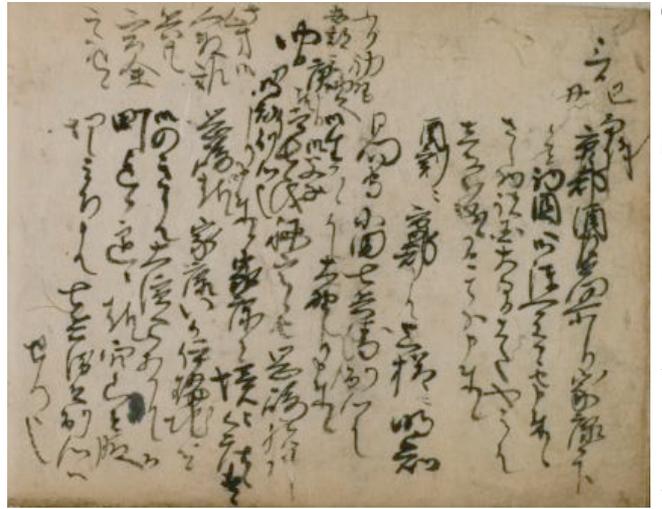


『家忠日記』の記事紹介と解説

②本能寺の変

②『家忠日記』巻三 天正十年（一五八二）六月条



三日 丑己

雨降

京都酒左衛門尉所より家康御下候者、西国へ御陣可有之由申来候、

さし物諸国大なるはたやミ候て、

しない成候間、其分申来候、

酉刻二京都にて上様二明知

日向守、小田七兵衛別心にて

御生かい候由、大野より申来候、

御父子
信長之儀秘定候由、岡崎緒川

明知別心也
より申来候、家康者境二御座候由候、

岡崎江越候、家康いか、伊勢地を

御のき候て、大濱へ御あかり候而、

町迄御迎二越候、穴山者腹

切候、ミちにて七兵衛殿別心ハ

セツ也

此方御
人数雑
兵共
二百余
うたせ候

解説

天正10年(1582)6月2日、世に言う「本能寺の変」が起こります。『家忠日記』にも、明智光秀の謀反の記述が、②の6月3日から4日にかけてみえます。まず、3日条の記述は、堺(大阪府堺市)見学に出かけた家康と共に同行していた「酒左衛門尉」(酒井忠次)からの伝言が書かれています。伝言の内容は、西国(中国方面)への出陣があることが記されます。毛利攻めを行っていた秀吉の援軍のための出陣と思われる。

3日の後半部には、いよいよ本能寺の変のことが記されています。「酉刻」(午後6時頃)に家忠は、京都で「上様」(織田信長)が「明知(智)日向守」(光秀)と「小(織)田七兵衛」(信澄、信長の弟信勝の子)の「別心」によって「ご生かい」(生害)したとの連絡があったと、その第一報を受けたことを記しています。

4日には、信長と信忠父子のことについては「秘定」である旨、岡崎(愛知県岡崎市)や緒川(同東浦町)から家忠に連絡があったことが記されています。「四日庚寅」の左下に「明知(智)別心也」と、家忠が改めて光秀の謀反について触れています。家忠は、家康が「境」(堺)にいたと記し、その後岡崎まで出向いています。そして、家康以下家臣たちが「伊勢地(路)」を通り、海路で大浜(愛知県碧南市)まで帰還したことを受け、家忠は家康の出迎えに赴いています。これが俗にいう「神君の伊賀越え」です。

4日の上部には、雑兵200人余を討ったという記述がありますが、これは伊賀越えの時のことを言っているのでしょうか。また、家康と同行していた穴山梅雪は切腹をしたことや、道すがらに織田七兵衛の「別心」は誤報であったことを聞き、その旨を『日記』に記しています。

本能寺の変に関する記述は、『日記』に所狭しと書かれてあり、家忠をはじめとする諸将にとって驚愕の事件であったことがわかります。また『日記』の筆使いや内容から、情報の錯綜と混乱ぶりが見てとれます。